



TITLE:

<書評> 飯島渉・久保亨・村田雄二
郎編『シリーズ二〇世紀中國史』

AUTHOR(S):

石川, 禎浩

CITATION:

石川, 禎浩. <書評> 飯島渉・久保亨・村田雄二郎編『シリーズ二〇世紀
中國史』. 東洋史研究 2010, 69(3): 407-415

ISSUE DATE:

2010-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/180044>

RIGHT:

飯島渉・久保亨・村田雄二郎編

シリーズ 二〇世紀中國史

石川 禎 浩

この三十年、日本の中國近現代史研究は大きな變貌と進展を見た。それは、同じくこの三十年に我々が目撃した中國の變貌と、ある意味で相沿う形の變化であったとも言えるだろう。大きく様変わりした日本の中國近現代史研究は、歴史の正負の遺産を抱えつつ今日に至った中國に向き合うにさいして、どのような知見を提供しうるのか。その課題に正面から應えようとしたのが、全四巻からなる本シリーズである。

周知のように、中國の存在感がいや増す中で、近年中國近現代史に關する總合的著作、すなわち通史や大型シリーズものが陸續と刊行されている。この五年間の主なものだけでも、「シリーズ中國」としての二〇世紀（西村成雄ほか、全七冊、青木書店、二〇〇四―二〇一〇年）、『中國の歴史一〇 ラストエンペラーと近代中國』（菊池秀明、講談社、二〇〇五年）、『現代中國の歴史』（久保亨ほか、東京大學出版會、二〇〇八年）、『新版 中國の歴史「近世―近現代」』（愛宕元・森田憲司編、昭和堂、二〇〇九年）、『圖說中國近現代史「第三版」』（池田誠ほか、法律文化社、二〇〇九年）、『叢書・中國的問題群』（全十二冊、岩波書店、二

〇〇九年）、『シリーズ 中國近現代史』（吉澤誠一郎ほか、全六巻、岩波新書、二〇一〇年）が既刊、もしくは刊行中であり、この上さらに十巻をこえる『岩波講座 東アジア近現代通史』（和田春樹ほか編）が今秋から刊行されている。

また、そうした近年の研究の深まりや多様化を踏まえた研究動向紹介の入門書も、大學生・研究者を対象として、『中國近現代史研究のスタンダード』（田中比呂志・飯島渉編、研文出版、二〇〇五年）、『中國歴史研究入門』（礪波護ほか編、名古屋大學出版會、二〇〇六年）、『二世紀の中國近現代史研究を求めて』（飯島渉・田中比呂志編、研文出版、二〇〇六年）などの形で刊行されている。このほかにも、一九七四年に刊行された『近代中國研究入門』（坂野正高ほか、東京大學出版會）の全面改訂版の編集が進行中だという。

まさに花盛りであり、この數年は日本の中國近現代史研究者の多くが、こうした大型企畫のいくつかを掛け持ちしているのである。このほか、研究動向を論じた個別發表の論文・論評を加えれば、その數はさらに増えるわけだから、近現代史研究の動向はすでに充分すぎるほど論じられてきた、と言えないこともない。

これにたいして、「中國の現在を、二〇世紀という時代との關係のなかでより深く理解したいと考える幅広い讀者」を対象とした本シリーズは、分野別の通史という總合著作の性質と研究動向の分析・展望という入門書の性質を二つながら兼ね備えるという斬新な内容と方向性を持っている。そのさいに意識されているのは、「刊行のことは」が提示する三つの課題、すなわち「最新の學問的成果を簡潔に示すこと」、「今後の研究課題や手法を展望す

ること」、そして「現段階での研究蓄積を整理することによって、日本の研究の發信力の基盤を形成すること」である。すなわち、本シリーズは「單に實證的な研究論文を集める論文集ではなく」、日本の中國近現代史研究の成果と課題をわかりやすい形で提示し、研究諸領域の相互の理解と對話に資することを目指しているのである。

それゆえ、全四卷に盛り込まれた各論説は、一方で各領域の研究史や関連研究の羅列紹介になるのを避け、また他方で個別の事實關係の提示に終始しないという、高いハードルを課されている。恐らくは、何回かの打ち合わせを経てその方針が徹底されたゆえであろうが、本シリーズの計四〇篇の論説は、そのほとんどがこの高度な要求に見事に應えたものに仕上がっている。實證的な研究論文の執筆に慣れた數十名の専門家を、このようにしっかりと方向づけた編者の努力には、最大限の賞賛が贈られてしかるべきであろう。

本欄の限られた紙幅で、内容豊富な四〇篇に上る論説を個々に紹介することは不可能である。かと言って、その概略を要約紹介することは、各研究分野の概況紹介を含む本書の性質上、要約のさらなる要約に陥ってしまう。こうした點に鑑みて、以下本稿では、全四卷の構成を示した上で、本シリーズが總體として持つであろう意義についてコメントし、併せて興味深く感じられたいくつかの論説に言及することにした。

第一卷「中華世界と近代」

總論 持續・變容する世界および他者との邂逅（村田雄二郎）

第一部 中華世界の構造と變容

- 1 清末の對外體制と對外關係（岡本隆司）
- 2 中國的世界像の變容と再編（茂木敏夫）
- 3 交通通信と帝國システムの再編（千葉正史）

第二部 社會經濟の動態と再編

- 4 沿海社會と地域秩序の變容（村上衛）
- 5 清代後期における社會經濟の動態（吉澤誠一郎）
- 6 中華帝國財政の近代化（岩井茂樹）

第三部 ナショナリズムと文化變容

- 7 辛亥革命の心性——湖南省の民衆文化を中心に（藤谷浩悦）
- 8 「藩部」と「内地」——二〇世紀前半の内モンゴル（廣川佐保）
- 9 近代中國ナショナリズムの感情・思想・運動（黃興濤／小野寺史郎譯）
- 10 中華民族論の系譜（村田雄二郎）

第二卷「近代性の構造」

總論 近代・近代化・近代性（飯島涉）

第一部 政治空間の再編

- 1 政治制度の變遷と中央・地方關係（金子肇）
- 2 地域社會の構造と變動（田中比呂志）
- 3 國際社會と中國外交（唐啓華／戸部健譯）
- 4 歴史學者と國土意識（吉開將人）

第二部 社會秩序の變容

第四卷「現代中國と歴史學」

- 5 農村社會と政治文化（笹川裕史）
 - 6 近代教育と社會變容（高田幸男）
 - 7 都市中間層の形成と大衆の時代（岩間一弘）
- 第三部 近代化の位相
- 8 中國と世界經濟（城山智子）
 - 9 通信メディアの展開と國際關係（貴志俊彦）
 - 10 衛生の制度化と近代性の連鎖（飯島涉）
- 第三卷「グローバル化と中國」
- 總論 全球化の奔流と主體としての中國（久保亨）
- 第一部 政治システムと政治過程
- 1 社會主義下の黨・國家と社會（高橋伸夫）
 - 2 大陸と臺灣の一黨獨裁システム（松田康博）
 - 3 戦後の國際環境と外交（川島眞）
 - 4 近代法制の形成過程（高見澤磨）
- 第二部 思想と文化の空間
- 5 リベラリズムとナショナリズム（水羽信男）
 - 6 言論・出版の自由（中村元哉）
- 第三部 社會經濟と民衆
- 7 近代的企業的發展（富澤芳亞）
 - 8 農村社會からみた土地改革（山本眞）
 - 9 生殖コントロールとジェンダー（小濱正子）
 - 10 統制と開放をめぐる經濟史（久保亨）

はじめに

- 1 日本の二〇世紀中國史研究（久保亨・村田雄二郎・飯島涉）

- 2 大陸中國の民國史研究（陳紅民／小川唯譯）

- 3 世紀轉換期臺灣の中國近現代史研究（張力／光田剛譯）

- 4 近代中國研究の史料と史學（桑兵／竹元規人譯）

- 5 韓國の中國認識と中國研究（白永瑞／金友子譯）

- 6 アメリカの中國近現代史研究（リンダ・グロoup／須藤瑞代譯）

- 7 文明史としての中國近現代史（上田信）

二〇世紀中國史文獻目錄

二〇世紀中國史關連年表

總索引

本シリーズの卷分けは、大まかに第一卷が一九世紀から二〇世紀初期、第二卷が二〇世紀前半、第三卷が一九三〇年代から一九八〇年代をそれぞれ対象としており、各時代の中で中國社會が直面した課題とその背景が、それぞれのテーマごとの研究動向紹介と有機的に結びつけられながら解説されている。もともと、時期はある程度區切られているとは言っても、二〇世紀における變化や轉換だけでは理解できない「不變」の側面やいわゆる「傳統社會」の構造や意識にも目を向けるべく、清朝中期を視野に入れ、さらには二百年、三百年といったより長期のスパンで二〇世紀中國を再考する視點（とりわけ第一卷と第四卷の上田論文）は、しっかりと保たれている。また、第四卷では内外における二〇世紀

中國研究の現状と最新の研究課題が展望されている。

全卷の構成を一瞥すればわかるように、盛り込まれている研究領域・テーマは、日本の研究のほぼすべてを網羅しており、とりわけ近年の研究の進展が著しい社會史的研究を廣くカバーしている。いわゆる「革命中心史觀」の後退にともなう、民國史研究が、さらには清末・民國という時期・領域、ないし政治史そのものを相對化する多分野の研究がこの三十年の間にめざましい發展を見せているわけだが、そうした内外における研究の現況は、この構成に見事に反映されていると言えよう。そして、多様化した研究領域それぞれの具體的成果は、今や個別實證の積み重ねから、より大きな歴史的文脈への接合を求められる時期に來ているようである。

昨年、本誌六八卷二號に掲載された本野英一氏の書評（城山智子氏の著書 *China during the Great Depression* に對するもの）は、「一九八〇年代から本格化した國民政府期の歴史研究は、新史實發掘という初期段階は通り越し、明らかにされた諸史實の相互因果關係を、より大きな歴史的文脈の中で整合的に説明する點に力點が置かれる段階になっている」と述べている。本シリーズの刊行は、こうした研究動向認識が國民政府期だけでなく、一九世紀から二〇世紀にまたがるほとんどすべての時期・領域の研究にも向けられつつあることを雄辯に示すものである。本シリーズが我々に提供してくれるのは、個別の實證研究で積み重ねられた新知見が、二〇世紀の、さらには二一世紀の中國を理解する上で持て得る歴史的展望にはかならない。

一口に中國近現代史の研究者といっても、私たちはそれぞれの

専門研究分野を半歩でも離れば、知らないことや理解し得ないことは實に多い。また、本シリーズの執筆者諸氏の専門論文を個別に讀んでも、せいぜいでその實證の意義深さがわかるだけで、著者が抱えているであろうより大きな問題意識については、なかなかつかみかねるのが現實である。それゆえ、各分野の第一線で着實な成果をあげつつある中堅・少壯の専門家が、研究のエッセンスを他分野の讀者を念頭において披瀝してくれる本書は、あらゆる意味で時宜にかなったものであると言えよう。第四卷で、史料と史學の關係について辛口のコメントを展開した桑兵氏は、史學の要諦を「できるだけ各種の目録や參考書を利用し、先人の成果と既知の資料を把握すること」と述べているが、本書が提供してくれるのは、まさに「先人の成果と既知の資料を把握する」上での格好の道しるべである。また同氏のいう「できるだけ各種の目録や參考書を利用し」について言えば、第四卷が掲げる膨大な量の「二〇世紀中國史文獻目録」が後學に裨益するものとなるだろう。

主に一九世紀から二〇世紀初期を扱った第一卷では、清朝時期を含む社會經濟制度の仕組みが、今日の中國の課題を念頭に置きつつ、丁寧な説明・解説されていることに特色がある。外交という觀念自體をも組上に載せる岡本論文、經濟・財政制度の仕組みを論じた吉澤論文、岩井論文などがそうである。とりわけ、近代の改革者からは目の敵にされた民間による徴稅請負方式が、統治コストや中國社會の實情から見た場合、實はある種の合理性を持っていたこと、そしてそれゆえに幾たびかの動亂や革命にもかかわらず生き残ったことを論じた岩井論文の指摘は、「近代」の目

で中國の「不合理」を見ることに慣れてしまった私たちには、頂門の一針とも言うべきものである。

岩井論文が、梁啓超による請負制批判を素材にして話を説き起こしているように、後年の中國近現代史研究は、長らく梁啓超ら中國を改造しようとした當事者の目を通して清朝の體制を理解してきた面がある。かれらの目に映じた現状が實は現状そのものではなく、理念的に指定された近代像や望ましい中國像の裏返しであったという事實は、「傳統」や民族論の再編を論じた茂木論文、村田論文でも重ねて指摘されている。また、中國の國土・境域觀念の變遷を扱った第二卷の吉開論文も、擴縮常なかつた歷代王朝の版圖のうち、清朝盛期のものが、後年になって「歴史上の中國」と認識された過程を概観している。いわば、清朝像にしても、傳統的な中國像にしても、それらは近代という過程の中で歴史的に生み出されてきたものに他ならない。それゆえに、こうした清朝（舊中國）時期の財政や社會を扱った第一卷の論説の多くは必然的に、通念化した歴史像の近代における形成過程と、その形成過程を認識するに至った近年の研究の歩み——すなわち研究者の側の視點の變化——を、合わせ鏡のようにパラレルに論じる構成となっている。こうした論考は、單なる研究史の整理に止まらない意義を持つていると高く評價できよう。

第一卷が、大きく言つて傳統的中國像とその變容をめぐる諸テーマによつて構成されているのに對して、主に二〇世紀前半を扱った第二卷は、「近代性の構造」をめぐるテーマが議論の中心である。飯島氏の第二卷「總論」によれば、近代性の構造とは、「近代社會を構成する制度や技術が世界の各地に均質性や同時性

を強制するようになった仕掛け」であり、政治や經濟だけでなく、「近代國家が個人と國家、地域と國家の關係を再編していく、その關係性そのもの」を指している。

かかる視點に立つて二〇世紀前半の中國を振り返るさいに立ちあらわれてくるのが、「社會の變容」、すなわち廣義の社會史的視座から再提示される諸々の新たな歴史像である。社會史的スタンスに立つてこの時期の時代相を見直すことは、「近代性の構造」や「社會」の變容が、形を變えながらも、現在の中國で繼續していることを強く意識させることにつながる。都市中間層を扱った岩間論文しかり、世界經濟との接合を扱った城山論文しかり、大國化を指向する外交を論じた唐論文またしかり、これらの論説を讀む者は、民國のそれら「近代性」が現代中國を見る場合にも、有效な視座を提供してくれることを實感するであろう。この點は、第三卷に配されているが、リベラリズムや自由を扱った水羽論文、中村論文、そして民國期の企業經營のあり方を論じた富澤論文なども同様である。

現代中國の課題（民主化、人權、世界經濟との協調的整合、企業經營の方式など）を二〇世紀中國の經驗と接合させ、短絡的な中國分析ではなく、歴史的經緯をふまえて検討することを訴えるこれらの論説は、現在の中國の課題が、實は二〇世紀を通じた課題であつたことを改めて實感させてくれる。現代中國との連續性について言えば、第一卷のいくつかの論説も、清朝から引き繼がれた遺産や清末新政の試みの繼續性に着目しているが、「社會」と「近代性」を切り口にした第二卷、「グローバル化」を掲げた第三卷では、執筆者の多くがより鮮明にその志向を打ち出してい

るようである。

とは言いながら、それら論説がことさらに二〇世紀中國を今の中國と性急に結びつけて論じているわけではないことは言うまでもない。例えば、清朝以來の中央・地方關係を財政權の管理と合わせて論じた第二卷の金子論文や、中國型企业經營のスタイルやその變容を扱った第三卷の富澤論文などは、さすがにそれら分野の第一人者だけあって、的確な具體例を合わせ示すことによって、我々の民國期理解そのものを大いに助けてくれる。専門領域以外についても、基本的事項については大枠を知っておく必要のある若手の研究者には、甚だ有用な論説であると言えるだろう。

主として一九三〇年代から一九八〇年代を對象とした第三卷では、現代中國との連關性・繼續性がより強く意識されていると同時に、人民共和國成立を境とする斷絶もかなり相對化されている。一九四九年をまたぐ連續性だけでなく、これまで斷絶・非連續性として語られてきたもの（例えばリベリズム）も、實は伏流として存在したという一面を持つのであって、それらが近年顯現化したことにも歴史的な脈絡があるというわけである。また、他方で中國共產黨・國民黨の組織の實情についても、これまでの常識的・理念的的理解とは大いに異なる見方が提示されている（高橋論文、松田論文）。政黨社會學的アプローチとも言いうるこうした政黨論は、政治史や事件史をトピックとし、それに關連させてそれら政黨の活動を論ずるといふ從來の發想からは生まれ出ないものである。革命中心史觀からする歴史の整理は、本シリーズがつとめて距離を置こうとするものであるが、その姿勢は國共兩黨が政治史の主人公となるはずの一九三〇年代以降を扱う本卷にお

いても貫かれている。

同様に、從來根強かった外國企業による經濟活動Ⅱ帝國主義侵略の典型例、という見方が相當に拂拭・相對化されているのも、本シリーズ全體を通じた特色のひとつだが、第三卷の富澤論文が提示する在華紡像なども大きな示唆を與えてくれるものである。すなわち、富澤論文は企業經營の側面から在華紡を見た場合に、その存在が經濟侵略とは異なる次元の意義を有していた——企業經營の先進モデルとして、中國の會社經營にたいしてライバル的模範となっていた——ことを紹介してくれるのである。改革・開放時期以降、企業經營のありようは、今日においても、いわゆる合辦企業・外資系企業による經營スタイル、すなわちグローバル・スタンダードの中國への導入とそれへの對應という形で、議論の過程にあるが、そうした表面的な類似性の比較を離れても、富澤論文や久保論文の示唆するものは多いと言えるだろう。

二〇世紀中國のさまざまなテーマにかんして、限られた分量でそのテーマ自體のアウトラインをわかりやすく素描しつつ、從來の歴史像の妥當性を再檢討し、さらに近年の研究動向や認識變化の過程を併せて解説していくというのは、實に難しい作業である。シリーズ全體としては、概ねそれに成功していると言つてよいが、第三卷では、一、二卷に比べて歴史事象列記型の記述、つまり教科書的記述に近い論説がやや目立つ（松田論文、川島論文、高見澤論文）のがやや惜しまれるところである。すなわち、「〇〇も行われた（試みられた）。……だが××という問題は簡單には解決されなかった（おのずから限界があった）」というような論述が散見し、いま一步の分析が缺けている印象を與えるのである。

前述のように、近年においてこの種の書物（概説と分野別の論評を兼ねる形態のもの）が複数刊行されているため、あるいは同じ執筆者が似たようなテーマで似たような文章を発表していることに起因するのも知れない。

以上紹介したように、本シリーズは現時点における日本の中國近現代史研究のほぼ全ての分野をカバーし、その最先端の研究動向と展望を餘すところなく我々に示してくれる格好の指南書である。第四巻で紹介されている中國、臺灣、韓國、アメリカの學界動向や進展の著しい研究分野、研究關心の推移なども、おおむね日本のそれに近く、その意味では研究の手法や關心などにおいても、日本の學界はこの三〇年ほど、國外の研究動向とほぼ歩みを共にしてきたと言えるであろう。

だが言うまでもなく、研究の行われている、あるいは行われるべき分野が、本シリーズに細大もらず、すべて組み入れられているわけではない。そもそものが、何でもかんでも盛り込まれているような事典風の研究紹介を我々は欲してはいないし、總花的紹介は本シリーズ編者の素志とも大いにたがうものであろう。それを承知の上で、あえて望蜀の言を述べるならば、第一―三巻で取りあげられた三〇の研究領域・テーマのうち、近年とみに研究が盛んになっているものについては、それが注目を浴びるに至った（つまりテーマが立つほどに研究蓄積が進んだ）理由、さらには各論説の執筆者がそのテーマに關心を持つに至った内在的・外在的事由の説明があってもしかるべきではなかったか。

本シリーズで紹介された三〇のテーマは、いずれもが二〇世紀

の中國を知る上で極めて重要なものであつて、言うまでもなく「隣家の犬が子犬を生んだ」に類する矮小なテーマなど一つもない。ただし、それぞれの論説執筆者の扱うテーマが、單にその人だけが研究しているのではなく、參考文獻が作成できるほどに深く、多く探究されているのには、さまざまな要因があるはずである。例えば、近年における社會史・文化史的アプローチによる研究の盛行は、それが流行だから、というような單純なものではないはずである。少なくとも、わたしは流行ではないはずだ、と信じてい。

とすれば、考え得る要因のパターンは、次のようなものかも知れない。すなわち、現在の中國のある課題は、實は二〇世紀を通じた課題であることが個々の研究者によって「豫測」「發見」され、それを解明するのに必要なデータや資料が、實は清末・民國にも探せばあることが判明したのだ、と。この場合、留學をはじめとして實地に中國社會を見聞、體驗できるようになったことによって、現代中國への關心・問題意識が歴史的中國へと遡及し、それが史料の探索や史實の解明へと學術的に展開したと見ることができよう。現在との對話や現代の問題意識によって、歴史を見る目が重層化し、多様化しているわけである。そして、そうした意識に支えられた研究を可能にしたものが、この三十年の間に利用することができるようになった膨大な資料群、とりわけ社會史的側面の變化を如實に傳えてくれる新聞・雜誌・檔案であった。

だが、現代中國が抱える種々の問題への關心を起點として、その歴史的背景や起源を二〇世紀中國のなかに見つけようとする研究スタイルは、一方において、現代の高みからする視點、例え

ば個々の研究者の持っている問題意識に整合的な事例や、考えの近い人物を歴史の中に見つけようとするある種のバイアスと常に隣り合わせであることに自覚的である必要がある。かつてのバイアスを拒否しようとする姿勢が、逆にそれぞれの研究者の持っている中國像に適合的なものを見つけようとする別のバイアスを生む危険性は、つねに存在するのである。

例えば、第三巻にはリベラリズムや自由の位相を扱った論説（水羽論文、中村論文）があり、歴史上の可能性を秘めた水脈として、中國の「自由」「個の尊厳」とその提唱者たちの思惟の意義が紹介されているが、そうした少数先覺者による精論のいわば對極にある一般知識界の通念については、残念ながらそれらを論じるテーマは立てられていない。水羽論文は、新文化運動を経て一九二〇年代に世を覆うに至った知的状況として、「戀愛さえ科學で説明されるべきであるかのような」科學萬能視の風潮のあったことを傳えているが、今となつてはほとんど意義はないものの、清末から民國にかけて確かに中國知識界を支配したそうした通念——すなわちイデオロギー——については、第一―三巻のいずれかにテーマが立てられるべきではなかったか。

科學萬能主義にとどまらず、社會進化論や社會主義思想といった事項についても、社會史や文化史の領域に力点を置く本シリーズなれば、なおさらそうした視點からイデオロギーの時代としての二〇世紀中國の知的大状況を分析する論説がほしかったところである。たとえば、社會進化論的なものの考え方に立つ少數民族觀は、現代中國においても決して消滅したとは言い難いからである。また、清末・民國のそうした思潮のバックボーンを成してい

る同時代日本との文化交流についても、近年「語彙史」や「概念史」を中心にその方面の研究に顯著な進展があるわけだから、觸れてほしかったところである。

むろん、こうした「あれがない、これがない」式の注文をつければ、きりはない。脱革命史觀以後の政治史はどうあるべきなのか、民衆を扱った分野の論説が少ないではないか、日中關係史は……、現にそうした分野を研究している讀者は、自らの研究分野が取りあげられていない場合、そうした注文をつけたくはなろう。だが、この書を読む我々は、次のことを肝に銘じなければならぬ。すなわち、本シリーズは現今の中國近現代史研究の各領域を俯瞰したものではあるが、それによって今後より深めるべき研究領域が仕分け、選別され、ある領域への研究に號令をかけるようなものではないのだ、ということである。本書の讀者の多くは實際に研究に従事する、もしくは研究を志す人たちであろうが、本シリーズで紹介された領域を研究しているからといってそれで安心すべきではないし、その領域に入っていないからと言って氣に病んだり、疎外感を感じる必要もない。むしろ、自分が直接には関わっていない研究領域の現在の到達點や問題點、そして研究視角を知ることによって、自らの研究關心をより幅廣いものにするための礎とすべきであろう。

このことは、ある資料がそれを使う研究者によって、それが使われる研究領域によって、異なる意味を附されていることに見てとることができる。例えば、中國鄉村における「雙軌政治」の存在を指摘した費孝通の一九四〇年代後半の主張は、第二巻の笹川論文では、地方の傳統的自治機能を破壊しかねない保甲制強行へ

の反對論の文脈に位置づけられるのに對して、第三卷の水羽論文は、同じ費の論者を引きながら、それを傳統的自治を一黨獨裁支配のもとで再生させるために、英米の憲政の導入を要求する主張として理解する研究を紹介している。ひとつの論者（資料）がそれを利用する研究者によって、かくも異なる意味を付與されるのだということを知るだけでも、我々の目は大きく開かれることになるだろう。

同様に、本シリーズ所收の論説には、今後探究すべき問題群が豊富に提示されており、讀者の知的好奇心を大いに刺激してくれるが、例えば數學でいう懸賞問題のように、研究者たるものがすべからずそれに取り組み、その第一解答者たることを目指すよう促すものではない。解決されるべき問題とは、すでに設定されているのではなく、研究を進めていく中で認識・発見され、研究の深まりに歩調を合わせる形で次々と立ち現れてくるものである。各論説が提示する問題群として、それは各執筆者が誰かに與えられた課題ではなく、自ら研究を深めていく中でつかみ出したものにほかならないこと、これは本シリーズの論説のどれもが教えてくれるところであろう。いみじくも第四卷の桑兵論文が過度に研究動向に反應する傾向を戒めて、「問題を掲げて材料をさがしてはならない」と説くごとく、各論説で提示されている問題群のよって來たところを見ずに、テーマや問題點だけを鵜呑みにして、それに追従してはなるまい。要領の良いつまみ食いこそはこのシリーズ刊行に盡力した編者・著者たちの最も歓迎せざるどころであろうことは明白だからである。

最後になるが、このような総合的な學術動向の共同作業が可能な背景として、日本における重層的・網羅的な學術ネットワークが中國近現代史學界において形成されていることには、今さらながらにある種の感慨を覺えざるを得ない。第四卷の「あとがき」にも述べられているように、特定の大學や學會に依存することなく、これだけの共同作業をおこないうる國は少ないし、また日本においても、かくも組織的な研究動向整理が時々に行われる學術領域は中國學のほかには多くあるまい。日本の中國近現代史研究が關連諸學の成果の吸収とそれらとの對話によって大きな發展を見たように、かかる好條件のもとで完成したこのシリーズの成果が獨り中國學だけでなく、他の領域・分野の研究にも新たな知見を與える大きな契機となるよう期待したい。

また同様に、本シリーズは、近年對外的な發信力・競争力の低下に警鐘が鳴らされつつある日本の中國近現代史研究にとつて、まさに廣く世界に發信すべき最良の成果のひとつである。聞けば、本書はその英語版の刊行をも念頭においているというが、それが實現し、國際的に見ても充分な内容と貴重な提言とを合わせ持つ本書が、世界の中國學研究にとつても共有されるべき資産となるよう願つてやまない。

第一卷―第四卷 二〇〇九年七月―一〇月

東京 東京大學出版會

菊判 第一卷二三二・第二卷二三二・第三

卷二三〇・第四卷二五四頁 各三八〇圓